

平成 27 年 11 月 6 日（金）北綱島小学校 公開授業研究会

【講演会】

講師：鳴門教育大学大学院 教授 村川雅弘先生

テーマ：「アクティブラーニングと防災安全教育」

国の動向と今日の取り組みの話をしてします。

時間のある限り他校の取り組みも紹介します。

防災教育との関わりと「3つの声」

昭和 58 年の 5 月 26 日から防災に関わっています。この日は、秋田、青森で地震がありました。日本海中部地震です。小学生が校外学習先で津波にあいました。たぶん学校関係者の皆さんの記憶に残っているかと思います。その翌年が長野県西部地震。御嶽山の近くで地震がありました。日本海中部地震に関しては 10 日間ほど、翌朝 8 時過ぎから秋田に入り、レンタカーを借りて、15 校くらい調査しました。大阪大学の助手の時です。自然災害特別研究に学部全体で取り組んでいましたので突然行くことになったのです。その経験もあり、20 年前の阪神淡路大震災で、神戸市にかかわり、カリキュラムと副読本作りを行いました。そして、東日本大震災の後、岩手県のカリキュラム作りにもかかわりました。こんな経緯もあり、北綱島小学校の研究にも関わらせていただいています。

いろいろなところで三つの声を紹介しています。

まずは、「教師の声」です。揺れがおさまり子どもが机に潜っている時の教師の言葉かけです。落ちついたゆっくりとした声で「大丈夫だよ」と言ってくれたので「安心した」と、長野県の小学校 2 年生の子どもが語っていました。教師が慌てず、子どもを安心させる言葉かけが大事です。

2 番目は「子どもの声」です。長野県西部地震の時に学校をしばらく閉じました。そうすると村の人が元気をなくしてきたことに校長が気付きました。「これはあかん」と。震災直後、大人は行く末を考え打ちひしがれている。一方の子どもたちは集団生活を楽しんでいたりしている。子どもたちはあどけない。校長先生は子どもを村に戻そうと考えました。子どもの声が村に戻ってきた時に、大人たちはまた頑張ろうという気持ちになりました。子どもたちが姿や声が大人の支えでもあったと改めてわかったのです。

3 番目は、「被災者への声」です。阪神淡路大震災のとき、被災者に配るお弁当の包み紙に地元の子もたちが自分たちで調べた記事を書きました。たとえば、自衛隊の方の思いやお風呂の入る場所など、こういった情報を被災されている方は必要としています。子どもたちが取材して新聞にして発行しました。これが、被災者の方々から大変喜ばれたということです。

避難訓練を見直そう

平成 27 年 5 月 15 日、北綱島小学校の避難訓練を見せていただきました。子どもたちは何時何分に地震があると聞いていたので、地震の放送が始まる前に机の下に隠れている子どももいました。先生方も「お・か・し・も」を事前に指導しました。そして、校庭に避難後、教室に戻ると、先生方と子どもたちで振り返りをしました。その日、北綱島小の昆校長に、「地震の起こる時間を事前に子どもに知らせている訓練はどうなのでしょう」「学級担任に知らせずにそっと数名の児童にトイレ等に隠れてもらうのはいかがでしょう」

とアイデアを出してみました。

このような意見を言った私なのですが、ここからは懺悔の話です。私が勤務している大学でタイムスケジュールを組んでの避難訓練がありました。運営側の事務方は真剣に行動していました。私は教職大学院の授業を現職教員の学生に行っていました。13:10 から避難訓練があると学生に事前に伝えておいたので、実際の訓練になったときには、学生は机の下にもぐりました。その後、津波が来る設定でした。いったん避難もしましたが、授業を行うために津波を避けて避難してくる人たちの間を掻き分けて教室に戻りました。「お・か・し・も」は守れませんでした。「しゃべらない」は守れてないし、「戻らない」も授業するために守れませんでした。

次期指導要領が目指すもの

ご存知のように平成 26 年 3 月 31 日に「育成すべき資質能力の検討会議」の論点整理が出されました。それを受けて 26 年の 11 月 20 日に文部科学大臣諮問がありました。そして、27 年 8 月 26 日には「教育課程企画特別部会論点整理」が出ています。2020 年から 10 年間の日本の学校教育が進むべき道のほぼ全容が明らかになりました。この論点整理のキーワードを少しまとめてみました。

一つは教科の学力も大事だけれども、子どもたちが大人になりもっと大変な時代になった時に、どのような課題に出会っても、どのような職業についても共通に求められる、いわゆる汎用的能力を学校教育でしっかりと育てなければいけないというのが基本です。そういう意味では、学力観が幼保小から中学校、高等学校、大学、社会人まで一本貫かれたということです。

そういう力を付けるために、「アクティブラーニング」という言葉が出てきています。「アクティブラーニング」の考え方も小学校、中学校、高等学校、大学と、これも一本貫かれた。いわゆる学力観・能力観とその育成のために求められる授業の基本的な考え方の二つが一本貫かれたということです。縦の連携がより強固になるのが次の学習指導要領です。

そして、こういう言葉も書かれています。「社会に開かれた教育課程」です。これまでは、生活科と総合的な学習が社会に開かれていたのですが、教科の学びももっと社会と関わっていかねばいけない。総合の充実も大事なわけだけれども、教科の学びがいかにか生活とか社会とか将来につながっているのだという意識や自覚を子どもが持つような学びが必要ということです。これは正に横の連携をもっと強化しなければならないということです。

汎用的な力と教科の学力も育てる上で、校内の先生方が協働するだけでなく、地域や家庭とも連携しながら子どもたちを育てていくといったカリキュラムの作り方、いわゆる「カリキュラムマネジメント」がキーワードとして入ってきました。そのためには授業研究や教員研修の工夫改善が必要です。

そして、小学校に関しては「スタートカリキュラムの充実」、このあたりがキーワードになります。

北綱島小の取り組みから見えるもの

北綱島小はこれら全部に取り組み始めています。子どもに付けるべき力はこういう力だと考え、授業もアクティブラーニングを目指しています。テーマは身近な地域とのかか

わりが強い防災を中心にやっています。教員研修も工夫・改善が進んでいます。今日の授業でも地域の方との関わりがより広がって深まってきているのがよく見える取り組みだったと思います。

この10年間ほど見ただけでも、いろいろな学力観が出されています。しかし、目指すことは一つです。だれかに言われなくても、自分たちで課題を見つけて、同級生だけでなく地域の方や専門家などの様々な立場や年齢の人とコミュニケーションを図り協力しながら問題解決していく力が求められています。基本的にはこのような力がこれからの子どもたちに求められています。

今日の授業を振り返ってみましょう。

まず、個別支援学級。この授業で感じられたのは具体性です。具体的な場面で、行動をしっかりと考えてやっている。自分で考えたことでなければ、具体的な場面では行動できない。その辺りをしっかりと意識された授業だったと思います。学習カードのような視覚的なものを使って、子どもたちに考えさせるという工夫がなされていました。

2年生は「とびだせ探検隊」という単元です。「子ども110番の家」の学習でした。子どもたちが地域に出て行った時にもっと意識するべきなのは、「子ども110番の家」の存在です。昨年度、北綱島小学校に来させて頂いた時に、学援隊や「子ども110番の家」を教材化したらどうですかと話をしました。地域には様々な方がおられるのに、知らないとお互いに頼れません。学援隊や「子ども110番の家」を学習材にした取り組みは日本全国どこでもできる非常に汎用性の高いものです。何よりも地域の方がいつも子どもを見守ってくれている地域は安全です。他に、私が北綱島小に紹介したのは「水やり小僧」の実践です。20年ほど前に鳴門市内の小学校でやったものです。子どもたちが自分で育てた草花をお世話になったところにプレゼントするという取り組みです。草花をプレゼントするだけでなく、水やりしながら登下校する。キャップに穴をあけたペットボトルに水を入れて、水やりをするのです。そうしているうちに、水やり小僧が来る時間帯に地域の方が外に出ている。そこでコミュニケーションが図られる。地域が子どもを見守ってくれる。登下校の時に、地域の方が家の中ではなく、どンドン外に出てきて子どもと関わりをもつ。そういう地域は、子どもにコミュニケーション力が身につくだけでなく、より安全な地域となり子どもも過ごしやすいし、親も安心できる。学援隊や「子ども110番の家」などを中心に、地域の方たちと子どもたちが、もっと日常的に関わるようなことがとても大切だと考え、取り組んでもらっています。

次は、5年生の取り組みです。昨年、徳島で防災に取り組む学校を紹介しました。子どもたちが家族のための防災マニュアルを作っていました。子どもの作った防災マニュアルは大人が作ったものには勝てません。専門的な知識、イラスト、カラーを含めてすべて大人には勝てないのです。子どもが防災に取り組んで自分たちのマニュアルを作るのに何が一番のメリットかという、避難経路は共通にあったとしても、それぞれの家は建っている場所も違うし強度も違う、家族もいつ、どこで、何をしているかも違う。子どもが作るよさというのは、一つは身近な人のためにマニュアルを作るところにあるのではないかと考えました。自分たちの作ったものを多くの人に活用してもらおうということは、自分たちの記述しているものが人命にも関わるので、間違っはいけないということで文章だとかイラストに関して徹底的に吟味する。個人で作る場合はそういうあたりが弱くなる。分科会に出ていましたが、そのあたりをうまくやっていけば、家族のために作るというのは非常によいと思います。マニュアルは使われないことが一番いいわけですが、これ

をもとに家族で防災について話し合うきっかけになるということがとても大切なのかなと思います。例えば、(写真を示しながら) この子のマニュアルには、その時間に家族が何をしているかということについて書いてあります。自分の家の避難経路とか、家族がどの時間にどんなことをやっているか、お互い分かっていることがとても大事なのです。子どもの作る家庭防災マニュアルが、家族のことを改めて知るといことや家族と一緒にこういう時はどうしようかと考えるきっかけになればいいのかなと思いました。

最後は、4年生の「ぼくらは北綱消防団」です。振り返りのシーンしか見ていないのですが、子どもたちの話を聞いていて、最後のシーンしか見ていない私でもジーンとききました。何人かの子どもの話を聞かせてもらいましたが、(写真を示しながら) この子が先ほど先生が紹介された子どもですね。家でよく弟と喧嘩をしているらしいです。消防団のことを学び、今、自分たちのできることを考えたとき、本人はここ(弟とよく喧嘩すること)をまず直さなければいけないと思っている。防災安全教育の中で、自分のことに気づいているというところがいいですね。(写真を示しながら) この方が消防団の垣中さん。この方を注意して見ていたら、半分泣きそうでしたね。子どもたちが振り返りの話をしている写真ですが、一番感動したのは、「消防団の人たちを尊敬している」「誇りに思っている」といった言葉がたくさん出ていたところです。消防団の教材化が非常によかったかなと思います。

アクティブラーニングを考える

アクティブラーニングについて話そうと思います。

国としてはあまり定義付けをしていませんが、課題の発見、が大事です。課題も自分たちで見つける。様々な学力観がありますが、先ほども述べたように、主体性や解決に向けた問題解決、協働性の三つが最大公約数です。課題の発見が一つ目、協働的が二つ目、主体的が三つ目です。結局は、子どもたちにこれから付けたい資質能力はアクティブラーニングの定義の中に全部入っている。学習形態、学習方法にとどまっていないということを理解してほしいと思います。

共通の課題解決に向かってよりよい解決を求めていくこと。この課題解決というのは、防災などの現代的な課題だけでなく、算数の面積の問題をみんなで解くときも、どの解き方が早くて簡単か、正解に近づくかをみんなで話し合ったりする。よりよい解に向けメンバー一人一人が意識しているか。分からなければ分からないなりに、一人一人がちゃんと自分の考えをもって発信することが大事です。子どもたちは答えが分からないときに、「忘れた」とか「分からない」とかと、しり込みしてしまう。これからの子どもたちに求められているのは、誰も答えをもっていないというときに、みんなでなんとかしようとすることです。テレビでやっている「下町ロケット」も、みんなでちょっとずつ議論をして、誰かのアイデアや誰かのつぶやきを聞いたことによって、新たな発想やアイデアが出てきて、それをまた誰かが聞いて、「あっ、それは～ではないかな。」と考え、問題解決していきます。このように、みんなで答えではないけれど、答えに近づいていくような、分からないなりに分からない者同士が、一緒に考えていくことが求められているのです。それは、算数でも国語でも一緒です。一人一人が責任をもって、自分なりの考えをもって、表明しなければなりません。そのためには、共感的な集団をしっかりと作っていかないと

アクティブラーニングの成立条件

この半年くらいの間も学会で発表したり、セミナーを開いたりしてきました。一週間ほど前もお茶の水女子大学でセミナーをしました。230人集まりました。アクティブラーニングの成立条件についてまとめてみました。

一つは、アクティブラーニングができるためには、集団は何人であっても、各メンバーが、答えがわからない、自信がなくても、自分の考えを少しでも持って言えることです。受容的な人間関係があるからできるわけです。これが大事です。自分なりの考えをもつことによって人の考えと比べたり関係付けたりして、こういう点が分からないとかここが弱いとか、人の考えを聞いて自分の中であいまいだったものがはっきりしてくる。そのためには、お互いを受け入れ合う関係が大事です。

次は問いや教材です。子どもがやりたい、なんとか解決したいといった、あるいは興味関心が高まる、いろいろな意見が出る、そういうような問いや教材の工夫が大切です。

もう一つは思考ツールです。付箋を使う授業がはやっています。去年の秋くらいからこの一年間、小学校、中学校と総合学習の授業もたくさん見てきましたが、そのうち7割が思考ツールを使っています。しかし、そのうちの7割がはずしています。今日の授業では子どもたちにこんな思考をさせたい、こんな考えをもってほしいのに、そのツールを入れたことによって、逆の方向になったり、子どもの思考が妨げられたりする。使い方を間違っているのです。本来、思考ツールは子ども一人一人の思考を促進する役割を担っているのに、使い方を間違えると逆の効果に陥ってしまう。適切な手法を考えないといけません。そのためには、教師自身がイメージすることです。今日の授業で、子どもたちにどのように考えさせたいのか、そのためにはどのような思考のさせ方がいいのかを考える。

アクティブラーニングで大切なのは話し合いが活発だったというだけでなく、個人個人が話し合ったことによって自分の考えが深まったり、広がったりしていなければならない。質が問われるのです。そのためにはまず個人でしっかり考える。なかなか個人で考えられないからペアやグループで考えさせる。ペアだと、自分が話し始めないと進まない、自分で考えないといけないという効果があります。そして、3人か4人のグループになって話し合い、全体で考えて、もう一回個人に戻す。今日の4年生の最後の振り返りなどは個人のものであります。必ず個人に戻すことが大事です。もう少し言えば、今日の話し合いの前と今と自分の中でどういう違いがあるか、ということ振り返らせることが重要です。今日も何人かが、友だちと話し合ったことで自分がどう変わったのかを、語っていたと思います。個人思考と集団思考のバランスと関連が大事です。

子どもたちに自分の考えをしっかりと持てと言っても、誰もがうまくしゃべれるわけではありません。絵でも文章でも、どんな表現の方法でもいいのです。メモでもいい、イラストでもいいので、自分の考えを持って話し合いに臨むということです。特に中学校にいくと、子どもたちがワークシートやノートに自分の考えをなかなか書かない。半分くらいが書かないのです。教師が板書して初めて書く。ノートやワークシートにはあいまいなものを書いてはいけないという気持ちがどこかにあるのでしょうか。ノートは整然と書かなくてはいけないと思っているみたいです。正解主義に子どもたちが陥っている。

アクティブラーニングは授業の改善、学習方法の改善にとどまらないと思っています。アクティブラーニングは生き方だと思っています。これからの大変な世の中を生きていくときに、みんなで問題を見つけて、そして知恵を出し合って問題解決していくんだという生き方を、アクティブラーニングを通して子どもたちが身につけていくということが大事

なのだと思います。

アクティブラーニング的な研修を

北綱島小の資料を見させていただきました。この学校とは一年半ほどの関わりしかありませんが、30 数年前から防災に関わる仕事もしてきて、防災の取り組みとして汎用性の高いモデルになるかなと思っています。先生方が紹介しているように、ここの学校が扱っている教材はどこ地域の学校でも、大規模校でも小規模校でも、取り組めるような教材を扱っています。そういう意味で非常に汎用性が高い。(資料編の系統表を示して)この系統表から始まり一つ一つがモデルとなるかなと思っています。大事なことは、こういうものができあがったというプロダクトだけでなく、大事なのはプロセスです。この学校がどのようにしてこの系統表から学習指導案までを作ったのか、そのプロセスを写真を見ながら紹介したいと思います。

いろいろなところでカリキュラムマネジメント研修をしています。この学校でも、まずやったことは、今あるカリキュラムを叩き台にしたことです。PDCA ではなく DCAP と言っています。今までやってきたこと、まずこの財産とか、経緯とかを生かすことが大事なのです。今あるものを少し見直しましょうと、昨年度末の研修を行いました。昨年度、実際にその実践をされた先生に付箋に書いていただきました。よかったことや改善策などを出し合いました。

学年ごとに見直すグループ以外に作ったのが、学年間系統チームです。防災に関して、各学年の発達段階とか、各教科等の目標と内容との関連を見取ったときに、この学年ではないほうが良いのではないかとか、あるいは、これはこの学年でやっているが他の学年の学習活動と似ているとかいうことがよくあるのです。学年以外の先生方、校長、副校長、研究主任などで系統化を考えるチームを作りました。1年から6年までの防災のカリキュラムを、大きな構想で考えるチームです。お蔭で一つの大きな流れになったのではないかと思います。

このように、前年度の研修で系統化チームが系統性を整理してくれていましたので、本年度の5月の研修では、前年度の先生方がいろいろと整理してくれたことを踏まえて、新しく異動してきた先生方も加わって、新たな学年集団で年間指導計画を整えていきました。今回出された資料編を作っていく中で、このような研修をやっていたのです。

こういった研修はアクティブラーニングと全く同じだと考えています。結局は、アクティブラーニングをしようと思ったら、研修がアクティブラーニングにならないといけない。今回、子どもたちの学習の仕方を見てもそうです。いろいろな思考ツールも使っていましたが、教師自身がこのような研修をすることによって、こんな授業ができるようになったのです。私はこの学校に今年2回しか来ていませんが、こんな資料や指導案ができあがっていてすごいなと思いました。先生方一人一人が北綱島の防災教育に取り組んでいく中で、各自がもっているいろいろな知識やアイデアを出し合って、形にして、日々の授業の中で見直していった結果が今日なのです。そういう意味では正にアクティブラーニング的な研修をされた。先生方一人一人の力が発揮されて、このような形になってきているのかなと思います。こういった研修の仕方についても、この学校から学んでいただきたいと思います。

ではこれで終わらせていただきます。

